

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 ドストエフスキー 『死の家の記録』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

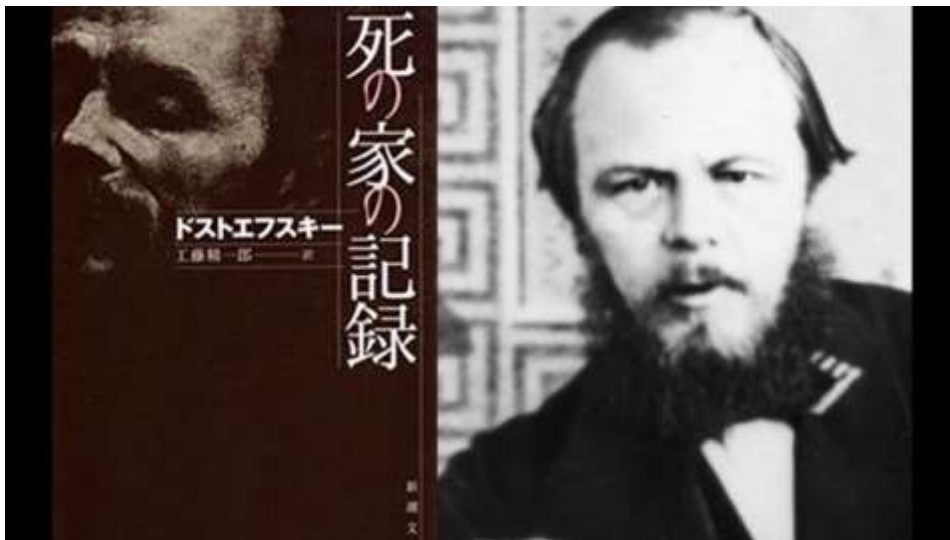
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 258 回のツイキャス読書会の課題図書は、ドストエフスキー 『死の家の記録』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「トルストイの『復活』は『死の家の記録』の読書感想文とさえ言える」

(引用はじめ)

「犯罪、裁判、刑罰、監獄に関しても、トルストイがあまたの学者の説を渉獵して、己れの判断にできるだけ公正を保つべく、執拗な努力を払ったのはいうまでもありません。その目的をもって、彼は監獄の実地を知るため、要塞や監獄の參觀を願ったが、ついに当局の許可を得ることができなかったのも、ある監獄関係の官吏をたびたび自宅に招いて、長いあいだ根気よく獄内のことを詳細に訊きただいたといわれています。単なる聞き書きによって、あの迫真的な監獄生活の描写、ドストエフスキーの『死の家の記録』と共に、この種の文学の双璧ともいうべき、卓越した描写を完成したトルストイの巨大な創作力には、いまさらながら驚嘆のほかはありません。

『死の家の記録』といえば、トルストイは『復活』の創作のためにこの作品を改めて通読して、「何というこれは驚くべき書物だろう！」と讃嘆の言葉を洩したと、P・A・セルゲエンコは伝えています。なおトルストイはかつて一度もシベリヤの地を踏んだことがないが、それにもかかわらず、囚人宿泊所の光景がさながら目に見る如く描破されていることも、一言つけ加えておく必要があります」

(トルストイ『復活』解説 米川正夫 修道社)

(引用おわり)

「死の家の記録」に書かれたのは、全く人間であった。
完全に人間のみを描いた。
人間が、人間を見ることは可能か。

(引用はじめ)

「女の子は母親の顔つきから判断して、こんな風に問題を解決した。これは両親やその知人などとは全く違った人達で、悪い人間に違いない、だからああいう風に扱われなければならぬのだ。こういうわけで、女の子はただ怖いばかりであった。で、この連中が見えなくなった時、彼女はほっとばかり嬉しかった。

けれども、瞬き一つせず、じっと目を離さずに囚人の行列を見つめていた、首の長くて細い男の子は、問題を別様に解釈した。彼は直接神から教えられて、これは自分やみんなと同じ人間であるが、彼らは何者かのためにしてはならない悪いことをされたのだ、こういうことが間違いなくはっきり分った。彼はこの人達が可哀そうであった。で、頭を剃られ足枷をはめられている人々と、彼等の頭を剃り彼らに足枷をはめた人々に対して、恐怖の念を覚えた。そういうわけで、男の子の唇は次第次第に突き出してきた。しかし、こういう時に泣くのは恥かしいことだと思ったので、少年は泣くまいとして懸命な努力をしたのである」 (トルストイ『復活』三十五章 米川正夫訳 修道社)

(引用おわり)

文学とは人間のみを書くものでなければならない。

(おわり)

仕方がなかったのか

—— もう何時間もこんなところに突っ立っているのだろう。そしていつになったら帰してもらえるのか ——

「令和農民一揆」「飲食店を守れ」などのプラカードを掲げた農家の団体の抗議とそれに乗じたサヨクどもの集団で 11 月の国会議事堂前は埋め尽くされていた。ヘルメットとアベノマスクで顔を覆い、盾で身を守っている機動隊員の男は小学校時代に書いた夏休みの作文をなぜか思い出していた。

(引用はじめ)

『夏休みの思い出』 エヴァタ

僕は夏休みにお父さんとお母さんとロシアに旅行に行き、オムスク監獄の見学会に参加しました。監獄と言うのは悪いことをした人が罰を受けるために入るところです。シュウ人たちはみんな頭を半分頭を剃られていて、ケンカしているみたいにししゃべっていたり、笑っていたりして怖かったです。

最初は怖いところなのかなと思いました。だけどみんなでティータイムみたいなことをしている人たちもいたし、ヴァイオリンを弾いた人が後からついてきて歌を歌っている人もいて、なんだか楽しそうにも見えました。なかにはお酒を飲む人やタバコを吸っていた人もいました。どうしてそんなことができるんだろうと不思議に思いました。クリスマス会もあるそうです。クリスマス会ではシュウ人達が考えた劇もやるそうです。ここではいろんな神様を拝んでいいんだよ、と係員の人が説明してくれました。僕は神様にお願いをするのはテストの前とサッカーの試合の前くらいだけど、神様のことを書いた分厚い本を大事そうに持っている人がいました。

お風呂も見学させてもらいました。サウナみたいな煙みたいなのが上がっているところで、裸のシュウ人達がギューギュー詰めになって、床に座ったり立ったりして体を洗っていました。中には下手な人もいたけど、足かせというものをつけたままズボンとかを脱いだり履いたりするのがすごいなと思いました。それから背中に傷みたいなのがたくさんある人が大勢いて気持ち悪かったです。

お父さんから聞いた話では、罰でムチでぶたれることがあるみたいで、千発も打たれたりすることもあるそうです。僕なら痛くて泣いてしまうし、やめてほしくて逃げてしまいます。シュウ人が少佐とかいう偉い人に「お願いします、だんな」と痛くしないようにしてくださいとお願いして、偉い人は話を聞いてあげるけど、やっぱり強くぶつそうなのでひどい人だなと思いました。

あと、罰で労働をする場所も見ました。料理を作ったり、革細工を作ったり、これも罰なのか、と思いました。ただ、外の寒いところで木の船を壊していた人達がいたけど、なんでそうするのか、よく意味がわからなかったです。

シュウ人達は馬や犬、鷺も飼っていました。馬は重いものを運ぶために飼っているそうで、とても可愛がられていて僕も可愛いなと思いました。

じゃあ犬は？ と僕が聞いたけど係の人はニヤニヤ笑って答えてくれませんでした。

ボロボロの羽の鷺が飛ぶ姿をみんな羨ましそうに見ていました。みんな自由になりたいんだな、と思いました。

そんなに自由になりたいなら最初から悪いことなんてしなければ良いと思います。貧乏で仕方なかったとか言うけどそれは良いわけだし、全部自己責任だと思います。

僕は大人になったら悪いことをする奴らを捕まえる警察官になりたいです。

(引用おわり)

少年時代に書いた作文には教師に絶賛され市内のコンクールで優秀賞に選ばれたっけ…… そんなことを考えていた矢先、デモ集団から男に

「おい機動隊、ぼーっと突っ立ってるんじゃないか！ 国家権力の犬が！」という言葉が投げられ、それに続いて嘲笑が浴びせられた。

と、次の瞬間、パーン、パーンという乾いた音が響き渡りデモ参加者がぺっと吐き捨てられたガムみたいに血潮と共に地面にベチャリと倒れて貼りついた。

銃を発射した機動隊員の男は周囲に聞こえるか聞こえないかな声で「俺だってやりたくてやった訳じゃねえんだ」と呟いたという。

この事件はテレビ新聞ラジオ、インターネットでも一切報じられず、男は網走監獄の囚人中隊に送られた。以上

(おわり)

『死の家の記録』 感想文

いろいろ良い文章だなと思う所があつてたくさん線を引きましたが一番心に残っているのは

(引用はじめ)

『どこにだって悪い人間はいるが、悪い人間のあいだにもいい人間はいるものだ』と、わたしは急いで気休めに考えた。『だれが知ろう？ この連中は、ひょっとしたら、獄外に残っている連中よりも、けっして、それほど悪い人間たちではないかもしれない』わたしはこんなことを考えて、そんな自分の考えにわれながら小首をかしげたものだが、ところが——ああ！—— この考えがどれほど正しいものであつたかを、もしあのころ私が知っていたら！（新潮文庫 P.128）

(引用おわり)

罪を犯して収容されているからといって人間性まで否定するのは間違っているし、罪と一人の人間としての評価は違うものだと考えさせられました。

収容されている人たちは悪い人かもしれないけど、その中でも支え合って生きている感じがして人間らしさというか温かみがあるなと思いました。

それは皆が過酷で支え合わない生きていけないというのがあるのかもしれない。

ゴリヤンチコフは貴族だからよけいに、とんでもない所に連れてこられたものと絶望していたと思うけど、どろどろの湯垢まみれのお風呂に入る時に仲間に応援されながらはいつたりして、考えが変わったのかなと思いました。

過酷で悲惨な場所だけど、察してあげる気持ちや、大目に見てあげる事が大切だし、そうしてあげられる人が居るからみんな何とかやっていけるのだと思いました。

ソルジェニーツィンの「イワン・デニーソヴィチの一日」など、収容所のお話は好きなので今回の作品も面白かったのですが、感想文を書くとなると難しかったです。

でも、読むことが出来て良かったと思います。長くてさっと読んだだけなのでまた読み返したいと思います。

(おわり)

『死の家の記録』 感想文

シベリアのオムスクの監獄での囚人達の様子を描いた手記とも記録とも思える作品です。読み始め、ここは、確かに監獄か？ と思いましたね、監獄の中は、一つの貨幣社会の体を成していたからです。囚人達は自由を得る為又、その中で生きる為に、ありとあらゆる事に身を投げ出す姿は、有る意味、異様に見える節がありました。ユダヤ人が囚人達の金の管理をしたり、その管理したお金を柵の杭の中に管理するシーン等少しユーモアにとんでいる様に見えます、また降誕祭の前の風呂場の様子も、頭の半分を剃り、足には重い足枷を引摺り薄い石鹸で洗うシーン、それぞれが折り重なる姿は、ギリシャ神話の煉獄を想像しました。又、芝居のシーンでも各囚人達が有り合わせのモノを使い貴族を風刺する劇も、なんだか読んでいて、ここは監獄ですかねえ？ と疑いたくなるシーンの連続でした。外国の監獄はどうか？ は知りませんが、日本の刑務所では、タバコはおろか酒等はもっての他です。又、笞打ち、1000 回とかは、あり得ないでしょう？ 江戸時代の仕置きでも、多分、100 回棒や鞭で叩かれたら、死にますよ！ 有る意味、それぐらい、厳しい監獄だ、と誇張したかったのではと感じましたね。又笞打ち一つでも、貴族と普通の囚人とは、互いのやり取りで、強くも弱くもなるというのも、その当時のロシアの差別社会を反映していた様に見受けられます。囚人を囲う柵に犬やヤギが入って来ても、犬は毛を剥ぎ取られ、ヤギは去勢されたあと喰われる、という合理主義ともとれる扱い方が罷り通っているのにも、ゾッとしました。又、その様な監獄から逃亡しても、すぐ捕まるというのも、監獄そのモノ自体、頑強で厳格に出来ている証拠だ！ 誇張している様に見えます。然るに、監獄自体が、その当時のロシアの状況を表していた様に感じました。

体験談として、私は、刑務所には、お世話になった事は有りませんが、高校を卒業して、就職に悩んでいた頃、おかしい行動(お札を燃やす)をした罰で、ある精神病院に入院しました。その体験談です。病院は、あくまで刑務所とは、違います。然し、自分の犯した罪の意識に、入院中ずっと、ここは刑務所と病院を勘違いして、痛い苦い経験をしました。何せ、肉体は健康だが精神がやられている、と来てる。病院の中もその手の奴ばかりです。思想犯的な奴もいれば、入れ墨のテカテカした、反社会的な奴もいました。当然取っ組み合いの喧嘩も絶えませんでしたね、そして喧嘩をすれば、喧嘩両成敗で地下の独房入りでさあ！ 酷い奴は、1ヶ月ソコに入っている奴もいましたね、又その当時の独房というのが、ポットン便所だけとマット一枚でさあ！ 私も一度入ったが、酷いものでした。特に、夜になると、あちらから、女の悲鳴が聞こえるわ、男の卑猥な罵り合いが聞こえて来るわで、夜も寝られない状況でしたね。だから地下室の為に、夜や昼や朝の感覚まで麻痺してましたね。ただ、その独房の壁に、誰が書いたか知らないが、天上天下唯我独尊という漢詩が落書きされてあったのを記憶してます。又病院内でのお金のやり取りは、基本的に駄目です。要するに入院患者は全員保護監察の身だからです、ただ、貨幣代りになるのが、タバコでしたね、入院患者は、大抵タバコをよくすってましたからねえ！ 酷い奴はカツバエビせん一袋に、タバコ三本とか、割りに合う合わんの問題じゃなくニコチン中毒のため、仕方なかったのですけどね、今、思えば、現在に至っても、その様な閉鎖病棟で日々生活している患者がいる社会というモノを考えさせられます。これも現代の裏社会の素顔でしょう。皆さんは、どの様に考えておられますか？

(おわり)

運命の転換

「シベリア送りみたいなもんだ」…… そういった言葉を何気なく使うことがあるが、実際のシベリアを何も知らずにイメージだけで勝手に知った気になっている、と、はたと思った。

足枷や笞打ちといった今では考えられない過酷な刑罰がある一方、酒を自由に呑んでいたり、動物を飼ったり（まあ、放し飼いまいたいなものだろうが）、みんなでサウナに入ったり（これは特別な日だけか）といった、イメージと違う描写に驚かされた。

やはりこれは「これが人間か」を先に読んでいたせいもあるだろう。いかにナチスドイツの収容所が酷いというのが、逆説的に良くわかった。

（シベリア送りより酷いことが、この地上にはかつてあったのである……）

今の日本では、彼らのように「おつとめ」をするということはまあ考えにくい。けれど、いつ何時中国やロシアに日本が支配されないとも限らない。

それに、毎日行きたくもない会社に行く生活が、鬼ばかりの世間が、監獄生活とどれほどの差があるのだろうか？

（引用はじめ）

人間が好き勝手に集まったのではなく無理矢理集められたような場所ではどこでもそうだが、監獄の中では外の世界よりも、人々が争ったり憎しみ合ったりしがちなように感じられる。

ドストエフスキー. 死の家の記録（光文社古典新訳文庫）(Kindle の位置 No.6931-6932). 光文社. Kindle 版.

（引用おわり）

無理にでも会社や職場、イベントごとなど、そういった集いに絶対参加しなくてはいけないという暗黙のルール。そういった場で「空気」を読み合いながら生きていくことに耐えられない人が一定数いると思う。

そんなはみ出し者が行きつく先が、昔はそれなりにあったのだと思う。最近の凶悪犯罪を見ていると行き場があまりに無いために起こしてしまったように思えてならない。

彼らは、自分の「運命を変え」ようともがいているのだと思う。

幸いにも日本には定年制度というのがある。（今は、まだ…）

私にも「おつとめ」が終わるときがやってくる。

それを信じて耐え忍んで行こうと思った。

（おわり）

体面と暴力

私は殺人をしたことはないが、証拠隠滅は、うまくやれる自信がある。女性ならわかるはず。月に一度、殺人現場の後始末だ。

ドストエフスキー作品なので、どんな面白い女が登場するか期待して読んだが、今回は刑務所内部の様子がメインで、女はほとんど出てこなかった。

ムショ暮らしの長い描写が続き、疲れてきた頃に、罪のない女が虐待された挙句、惨殺される話があった。

それは第二部 四 「アクーリカの亭主」という挿話だった。私は『罪と罰』の雌馬が殺される悪夢の 10 倍くらいの恐怖を感じた。

アクーリカという未婚の娘がいた。彼女に思いを寄せるフィリカという男が、ありもしない彼女の不貞の噂をばら撒いていた。家の恥だとアクーリカは母親から笞で折檻される。アクーリカは別の男と結婚するが、フィリカに間抜けな寝取られ亭主呼ばわりされた夫は、貞淑なアクーリカを DV で苦しめる。フィリカは兵隊に取られる直前、アクーリカに謝罪し思いを打ち明ける。アクーリカはフィリカを許す。そして夫に、今あたしが好きなのはフィリカよ！という。DV 夫は嫉妬のあまり、無実のアクーリカを殺害する。このアクーリカの夫が、ほかの囚人の気を引くために、妻殺しの経緯を語っている。

この挿話は、体面と暴力の話であると思った。

ここには、侮辱に対し、暴力で応えることを名誉とする家父長的風習のことが書かれている。

外部の敵から財産や家族を守るため、という大義名分が付いているので、正しいことのように錯覚するが、その実、暴力によって支配欲や権力が満たされるからやめられないのだ。家族を守るための正当防衛なら、ドメスティックバイオレンスなど存在しない。

暴力が立派な行為とされ、体面を守るための暴力の正当化は後を絶たない。

19 世紀なら結婚は奴隷制と似ていた。アクーリカのように、女性が人間扱いされないことは当たり前だった。

現在の日本国内ではどうか。

少女をナンパし、キモいと言われて暴力を振るった 30 代の男を擁護する意見に、匿名性の高いソーシャルメディアでイイねがたくさん付いているのを見れば、わかるだろう。

女性は暴力が怖くて夜中に一人で外出できないが、男性は「キモい」と言われるのが怖くて、おうちから出られなくなっちゃうらしい。→これをアクーリカの亭主が聞けば、脊髄反射で私を殴るはず。

五百ページに及ぶ「むかし刑務所にいた話」には価値があるが、「むかしワルかった話」、過去の暴力行為を誇らしいこととして自ら語るのは武勇伝武勇伝。武勇伝デデンデデン。カッコーン。箸にも棒にもかからない。

(おわり)

『死の家の記録』 ドストエフスキー 感想文

長編なので、今回三分の一しか読むことが出来なかったのだが、大変面白い作品である。

過酷と残酷さは想像以上であった。

囚人の個々の性格や行動の特異さと、それに相反する人間らしさを持つそれぞれの姿を、語り手(ドストエフスキー自身)が、研究者のように細かく「むさぼるように観察」し、分析していて読み手を飽きさせない。

「恐ろしく卑屈」で「中傷と悪口」の絶えない「まっくらやみの世界」に身を置いた時、このように人間に興味をいだくことができるのだろうか。そこに作者の持つ知性を感じずにはいられなかった。

書いても書いても書きれないくらいの「あらゆる種類の人間」が彼の何かを刺激したのだと思う。

「囚人を恐れる必要はないと、ぜったい信じている」(新潮文庫 P.9)

そういう彼の信念が獄中で、彼の何かを突き動かしているように感じる。

ここで生き抜く為には、「自分の知力の限り、能力の限りを注いで打ち込めるようなしごとをもたなければ」(P.34)

これが人間の本質なのだと思う。

この自由に仕事をする事が、私の感じる獄中のイメージとは全く違っていた。

与えられた仕事だけではなく自分で探す闇の仕事。生き抜くために、また考え求める。そんな意味の自由があったのだ。彼らは監獄を抜け出し、仕事を見つけることが出来たのか？

刑の 15 分前に飲む 1 リットルのお酒のために血のでるような金を貯めるとは、何と悲しいことだろう。ただの臆病者にならないために取り繕い、紛らわすためのお酒のために、費やす肉体。

稼いだお金が盗難に合わないよう、皆が「旧教徒の老囚人」にあずけておくようになる。

誰もがこの「善良な老人」を信頼するところに、どんな極悪非道な人間の中にも、わずかに残されたかすかな信仰心の様なものがあるのだと、ちょっと胸を撫で下ろした。皆が同じく老人を信じていることが、より人間らしく感じた。

兄の犯罪には無関係で穢れのない「アレイ」と語り手との尊い時間。

山上の垂訓(マタイの福音書)を「あるところに感情をこめて」読み上げたアレイに、求めるものの純粋な姿と監獄に入らなければ、アレクサンドル・ペトロヴィッチ・ゴリヤンチコフとは出会えなかったという皮肉な幸運を感じ、熱くなる場面だった。

「ええ、イエスはえらい預言者ですね、イエスは神の言葉を言いましたね。本当にすてきです」と。

彼の未来は確実に変わって行く。

そして、彼にも、アレイは忘れ得ぬ人となった。

こんな泥沼にも真っ白い花は咲くのだと涙が出てしまった。

語り手にとって未解決のままの、「同種の犯罪にたいする刑罰の不平等という問題」(P.94)

犯罪へ至った細かい人間の心理や過程が反映されずに、与えられた同列の刑罰が、「解決不能」の問題であった。しかし、その問題もそれぞれの囚人の生き方や苦しみの捉え方によって、当の本人達がどうでも良いと思っている場合もあり、何とも感じていない姿に、こちらが真剣に重大に取り組んでも、どうなることでもない、という落ちがよくあることのように面白かった。

何とも複雑な徒労感を感じる印象深い部分で、ことの大小はあるが、こんな経験は身に覚えがあった。

読み始めは、この暗さに耐えられるかなと思っていたが、ロシアのこの特殊な環境のさまざまな人物描写の面白さに、作家のすごさに、最後まで読んでみようと思った。

(おわり)

民衆を知ること 人間を理解すること

『これが人間か』にムーゼルマン(回教徒)と呼ばれる人たちが出てきた。

(引用はじめ)

彼らは無数にいる同類の群れに入れられ、休みなく体を引きずり回される。彼らはだれにもうかがい知れない孤独をかかえながら、体をひきずり、苦しみ、孤独のうちに死ぬか姿を消し、だれの記憶にも跡を残さない。

(『これが人間か』 プリーモ・レーヴィ 朝日新聞出版 竹山博英訳 p.112)

(引用おわり)

ナチスのラーゲルよりも恵まれた環境の『死の家に記録』にも、ムーゼルマンと同じような人たちが出てくる。例えばスシーロフである。つまらない報酬で身代わりに特別監房に入れられた気の毒な男である。

(引用はじめ)

この連中の特徴は――いつ、いかなるところにおいても、ほとんどすべての人に対して、二流どころか、三流の役割しか果たさないということである。こうした特徴が彼らには生まれつきそなわっているのだ。スシーロフは極度にみじめな青年で、まったく人のいいなりで、いじけきっていて、たたきのめされたような人間だった。べつに獄内のだれに殴られたというのではないが、たたきのめされたように生まれついていたのだ。(中略)彼はしゃべるのが不得手で、どうやらそれが、ひどい苦労だったらしい。話を打ち切って、何か用を与えるか、どこかへ使いを頼むと、とたんに元気づくのだった。わたしは、しまい、それが彼を喜ばせることなのだと、信じるようにさえた。(P.132-133)

(引用おわり)

しかし、そんなスシーロフでも、ゴリャンチコフに叱られた後で、哀れみから金を恵まれ、逆ギレするシーンがあった。『長年のあいだつきあっても、人間を見きわめることはむずかしいものである！』(P.140) (『カラマーゾフの兄弟』前半に出てくるアリョーシャに施されて逆ギレしたスネギリョフのエピソードに似ていた)

たたきのめされるように生まれついた人間がいるというのは、学校では教えてくれない非情な現実である。

近代市民社会では、そのことは隠されている。良識のある大人なら、そういうことは言うてはいけないことになっていると知っている。あからさまに、そういうこと現実を指摘して、わけ知り顔をしたが、小賢し大人もいるが。

しかし、学問や科学が進歩しても、たたきのめされがちな彼らがなぜ存在するかが、わかるわけではない。

ゴリャンチコフの指摘する通り、実のところ、人間を見きわめるのはむずかしい。

人権と人間の尊厳を確保してやるこれが近代市民社会の最低限のルールである。

このルールは、単に、たたきのめされがちの人々への哀れみのためにあるのではない。

人間を見きわめるのは人間には不可能だ、という戒めとして人権や尊厳があると考えた方がいい、とわたしは思う。

頭でっちな左翼インテリであったドストエフスキーが、流刑地で、ほんもののロシアの民衆と出会い、偏見に満ちた人間観を改めたのである。その後、彼が、類型的な理解を超え、様々な人間模様を、長編小説上に展開させたということのすごさを、よくよく考えてみるべきだ。

人間は抽象化された何かではない。皆がそれぞれの特有の事情を抱えて生きており、それぞれに何かしらの意志がある。人間を将棋の駒のように見立てて、その集合体を、安易に社会や共同体や国家などの設計可能な構築物とみなすのは、ナチスのラーゲルを生み出した考えと根底では同じであり、とんでもなく愚かだと思う。

(おわり)